俺は人外じゃなくて一般人だ！！

ホッキー(゜Д゜)

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

両親は、武道家でも何でもない只のサラリーマンと専業主婦

俺、山内辰巳も只のどこにでもいる一般人、只のモブキャラ

俺の通っている川神学園。

そこには、〝武神〟をはじめとした人外だらけ

どうか、何も起きずに卒業できますように!!

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 5
第3話 …… 12
第4話 …… 20
第5話 …… 24
第6話 …… 29
第7話 …… 35
第8話 …… 41
第9話 …… 45

第1話

２００９年５月
神奈川県川神市
俺、山内辰巳はほしいマンガやゲームを買いに川神市に出ていた。
マンガやゲームは俺の心の癒しである。
この癒しがなければ俺はストレスで死んでしまうかもしれない。
俺の通う学園がやばすぎる。
まず〝武神〟がいる。
学園の生徒、教師のキャラが濃い。
よく言えば個性がある。
よく言うつもりはないが……
学園特有のシステムがある。
あげればキリがない。
とにかく、俺は速攻で家に帰ってマンガとゲームを楽しむんだ。
意気揚々と家に帰ろうとするとある女の子が目に入った。
女の子は俺の通う川神学園の制服を着ている。
顔もどっかで見たことある気がする・・・・・
というか、気がするどころではなく毎日顔を見ている奴だ。
名前を師岡　卓也
れっきとした男である。
師岡、お前にそんな趣味があるなんて察してあげられなくてゴメンよ。
俺は邪魔しないように遠回りして帰るぜ。
バイクに乗りあまり、人の通らない親不孝通りを通って帰る。
やべえ、トイレ行きたくなってきた。
どっか、トイレねえかな。
しかし、ここは親不孝通り開いている店などあるはずもない。
しょーがねえ、どっかの廃ビルでするか
バイクを降りて、廃ビルに向かうと入り口には、ガードマンらしき人がいる。

トイレを貸してもらうため、その人の肩を叩こうとすると急にガードマンが振り向き、鈍い音と同時に膝から崩れた。
あれ？
ちょっと、おーい
何度呼びかけても反応がない。
しょうがないから、その人を横たえて中に入ることにした。
中には、数十人のヤンキー
なんじゃこりゃ。
「ああん、お前はどこのどいつだ？何しにきやがった？」
一人が、寄ってくる。
まあ、話せばわかってくれるよね。
借りに来た。（トイレを）
笑顔を作って詰め寄ろうとする。
俺の脚が一歩踏み込んだ瞬間「ざけんな。」の声と同時にヤンキーの大群が殴り掛かってきた。
何故に??

男は、目の前の男に恐怖を感じていた。
はじめは、ガキが一人で入ってきただけだと思った。
何をしに来たのかを知るためと半分からかう気持ちで詰め寄ったお前は何をしに来やがった？と。
俺は、怖がる姿を想像していた。
しかし、目の前の男は怖がりもせず、むしろ笑顔でこう言った。
「狩りに来た。」と。
瞬間、本能的な恐怖が俺を襲った。
川神の群狼のボスの俺が恐れた？
目の前の餓鬼に？
それは、俺にとって屈辱だった。
俺が、俺たちが、目の前の餓鬼一人に負けるわけがない!!

ざけんな!!
俺たち全員が餓鬼に向かっていった。

（トイレを）借りに来た
って言っただけなのに、なぜか目の前で殴りに来ているヤンキーの集団
マジでなんで?!
というか、本当にトイレ行きたい。
とっとと片付けよう。
向かってくるヤンキーの関節を極めてそれを輪のようにしてつなげていく。
無限轟車輪
柔術のちょび髭先生に教わった技だ。
人間の体重を利用して互いの関節を極めているため他人の手を借りないと絶対に抜け出せないらしい。
まあ、外のガードマンが目を覚ませば大丈夫だろ。
さあてと、トイレ借りて早く帰ろ。
早く、ゲームしないとな。
新作のゲームに思いをはせてバイクで家に帰った。

風間ファミリーが車を追跡してビルに到着した。
しかし、ビルの前のボディーガードは気を失い倒れており
ビルの中は人が輪のように繋がり悲鳴とうめき声しか聞こえなかった。
「おいい、どういうことだ?これは?」
ヒゲ先生が皆の心を代弁してくれた。

しかし、わからないとしか言いようがない。
武を嗜んでいる姉さんをはじめとする女子メンバーに聞く。
「こいつらの関節はきれいに極まっている。只者じゃない」
「加えて、相手の体重も利用し関節を極めるとなるとかなりの技量が必要となります。しかも、争った形跡がまるでないとなると・・・」
「となるとなんなんだ?まゆっち?」
岳人がまゆっちに尋ねる。
「この人数ですから、モモ先輩レベルが必要とされます。」
まゆっちの言葉に全員が息をのむ。
姉さんクラスの人がいる。
しかも、姉さんやまゆっちが気づかない人が・・・
浮かんだ疑惑に風間ファミリーは声が出なかった。

その頃、
やっぱり、ゲームとマンガは最高だなぁ
はっっっっっくしょん
誰か俺の話でもしてんのかな??
当本人は自室でくつろいでいた。

第２話

２００９年６月７日
川神市工場地帯
「軟弱な東の連中め!西国武士の気骨を見よ」
目の前で大友焔が改造大筒を学生たちに狙いを定める。
「大友家秘伝・国崩しぃぃぃぃぃ!!!」
無数の焼夷弾が夜の工場を紅く照らす。
って、焼夷弾とかありかよ!!
ヤバすぎるでしょ、コレ!!
「うむ、大・火・力!　これぞ西方十勇士の実力ぞ!」
大友が放った焼夷弾に満足している。
やべえよ、目の前に爆弾魔がいやがる。
というか、西方十勇士関係ないから!!全部火薬の実力ですから!!!
って言ってやりたいが焼夷弾ぶっ放されても困るから黙ってよう。
ガシャコンという音がした。
どうやら次の弾が装填されたようだ。
え?まだ焼夷弾ぶっ放すの??
「うわぁっと!　なんて広範囲!　何十人脱落したの?」
おい、川神!　ツッコむ所はそこじゃねえ。
というか、お前爆炎の中から出てきたよな。
爆炎の中から出てきたってことはアレを避けたって事だ。
スゲエな、おい。
とりあえず、安否確認だけでもしておこう。
大丈夫か?
「山内君、私は全然大丈夫。」
満面の笑みで返事が来る。
なら、よかった。
「というか、ちょっとやりすぎじゃないの!」
川神が大友に向かって意見を言う。
そうだ、もっと言ってやれ。

川神の言葉を全力で応援する。
「東西交流戦とはいえ、あくまで戦！　火傷でわめくな」
いやいや、火傷は結構ヤバいです。
「ま、言ってしまえば、これはロケット花火を相手に向けて撃つ発展形よ。　何ら問題はないな」
いや、大有りだから！
ロケット花火に書いてあんだろうが!!
人に向けて撃つなって!!
川神学園もカオスだけど、相手の学園も相当カオスだな。
川神と大友が目の前で戦いを繰り広げている。
なんで、俺は一般人なのにこの戦いに参加しているんだろう・・・
そう思いながら、事の発端である数日前の全校朝礼を思い出した。

数日前、、、
いつもの全校朝礼
俺は、あくびをしながら学長・川神鉄心の話を聞いていた。
「福岡の天神館が・・・週末、修学旅行で川神に来るらしいの」
ここまではいい、単純に「へ～」で終わる話だ。
しかし次だ、この学長はとんでもない爆弾を投下してきやがった。
「学校ぐるみの決闘を申し込まれたので、引き受けたぞい」
この学長、しれっととんでもない発言しやがった。
「東西交流戦と名付ける、激しい戦になるな」
名前なんかどうでもいいわ!!
こんなの、全校生徒が納得するはずがない。
と思っていたが、現実はそんなに甘くない。
川神学園に通う生徒は大半が武士の血を受け継いでおり好戦的
なにより、彼のクラス２―Ｆはそういう面白そうな企画は絶対に見逃さない
あ、コレ詰んだわ・・・
せめて、２００人に選ばれませんように!!
そう願うしかなかった。

それが、どーしてこうなった。
２００人は主に２―Ｆ、２―Ｓで構成されておりもちろん俺も組み込まれていた。
じゃあ、せめて救護班で!!という願いもむなしく
いざ、開戦したら最前線
なんなん！直江も葵も俺を殺す気なの?!
俺は一般人なのに!!
まあ、始まってしまったものはしょうがない・・・・・・・
だけど、これだけは言わせてもらう!!
俺は人外じゃなくて一般人だ!!
そして、現在に戻ると。
どーしよう?これから
大友と川神が戦っているのを見て、眉間にしわがよるのを感じながら少し上を向いた。

「でりゃあああ!!」
自分の得物である薙刀を扱いながら、一子は驚いていた。
山内辰巳という同級生に。
相手が焼夷弾を放とうと驚きもせず、ただ冷静に戦場に立っている。
一子は山内辰巳とクラスメートであるが、そんなに絡むわけでもない。
時たま目にする時はいつも眠たそうにしているか、窓際で日向ぼっこをしているかである。
自分や自分の姉のように武術を嗜んでいるという話も聞かない。
なにより、彼がめんどくさがりなので彼が強いかどうかも定かではない。
しかし、一子は一度だけ、一撃だけ彼の武術を見たことがある。

その光景は今でも鮮明に思い出せる。

それは、私がランニングをしている時だった。
その日は、たまたま走る距離を伸ばそうと思って山のほうへ走っていると木にサンドバックが吊るされているのに気が付いた。
誰が練習をしているんだろう？
練習が大好きな私にとってそれはとても気になるものだった。
すると、奥のほうから音が聞こえてくる。
私は反射的に近くの茂みに身を隠した。
息をひそめて、誰が出てくるのかを観察すると出てきたのはクラスメートの山内君だった。
出てきた人物に驚いたと同時に山内君がどんな修行をするのか気になった。
悪いとは思ったが、そのまま茂みに隠れてその修行をみせてもらうことにした。
耳をすますと声が聞こえてくる。
ふう、あと1撃で終わりにするか。
ええ！今見始めたばかりなのに!!
盗み見している私にはもうちょっとやってほしいなんて言えない。
しょーがないと諦め、私はあと1撃の修行を見ることにした。
山内君は空手の天地上下の構えをとる。
その構えの所作はとても見惚れるものだった。
まるで、姉さまが正拳を放つ時と同じようにただただ綺麗だった。
不動砂塵爆（ふどうさじんばく）
その言葉と同時に放たれた正拳はサンドバックを揺らさず正拳の当たった裏側を弾け飛ばした。
その光景を見た私は茫然としていた。
気が付くと、山内君はどこにもいないし。
辺りはもう暗くなりかけてるし最悪だった。
私は、一つ疑問に思った。

なんで、山内君は強いのにそれを出さないんだろう？
山内君は、学校でも決闘には絶対に参加しない。
ましてや決闘するところなんて見たこともない。
だから、東西交流戦の知らせは僥倖だった。
すぐ大和に山内君をメンバーにして最前線私と同じところに置いてもらうように頼んだ。
大和は難色を示したが何とか聞いてもらえた。
そして今、私は確信した。
先日の私たち風間ファミリーの依頼中に起こった廃ビルの襲撃を行ったのは山内君だ。
しかし、本人がそれを周りに言わないのなら私が口を出すべきじゃない。
一子はその考えを胸に秘め、再度大友に集中した。

「逃げるしか能がないのか東の腰抜けはぁぁ!!」
大友が川神一子を国崩しで狙っている。
ならば、美しい自分は国崩しを避けた川神一子を美しく毛利の三連矢で射ぬけばいい。
そう西方十勇士の一人である毛利は考え川神一子を狙おうとした。
その瞬間とてつもない殺気が体を襲う。
誰だ！間違いなくこの場所を把握している。
辺りを見渡すが誰もいない。
再度、落ち着いて川神一子を狙う。
狙ってるうちに、川神一子の近くにいる男に気が付いた。
男は近くの川神一子と大友の戦いを見ずにこちらを睨んでいる。
こちらの存在に気が付いている？
馬鹿な。
笑い飛ばしたいが、それをする根拠がない。

むしろ、あちらがこっちに気が付いていると考えるほうがすんなりと受け入れられる。
それを確かめようと男を見る。
男は先程と打って変わって笑顔だった。
加えて、何かを言っている。
口の形をまねて発声してみる。
「し!!!!!・ね・よ?」
!!!!!
背筋に冷たいものがはしる。
やばい、あいつはヤバすぎる!!
その場から逃げようとした。
その瞬間、爆薬をつけた矢が毛利のすぐ近くに直撃する。
その余波を受けた毛利は意識を手放すしかなかった。

俺は眉間にしわをよせながらこれからどうするかを考える。
川神は大友と接戦を繰り広げている。
あれ?これ俺いらなくね??
なんか二人の世界入ってるし。
よし、俺の心は決まった。
決心できるってこんなに素晴らしいことなんだな。
自分の顔が笑顔になるのがわかる
逃げよ
声に出てしまったが、幸い大友の国崩しの爆音でかき消された。
ナイス!!国崩し!!
なんか、違う方向からも聞こえたような??
まあ、いいか。
それよりも早くこの場からの脱出だ。
俺は二人にばれないようにその場を抜け出した。

いやー、交流戦する前に下見に来といてよかったぜ。
誰も来ないだろうと思われるスポットも見つけたしな。
よし、そこに行って交流戦終わるまで休んでよ。
俺はスキップしながらその場に向かった。

第3話

硝煙の煙が漂う中、下見で見つけた誰も来ないであろうスポットに向かっていた。
ああ、マジで早く終わってくれ。
あ、なんか今妖怪・ハゲロリコンが本気出した気がする。
あいつが、本気を出すってことは本気を出さなくてはいけない状況か自分好みの幼女を見つけたかのどちらかだ。
あのハゲはあまり力を出さない。
俺が思うに多分、後者だろうな・・・
お相手も可哀想に・・・南無。
誰かはわからないがハゲの相手に合掌する。
というか、いつの間にか砲撃の音が聞こえなくなっている。
一子が倒したんだろうか？
やるなぁ。
と考えていると、自分の見つけたスポットにはすでに先客がいた。
その数は、二人。
誰なんだろうか？
ここは、誰にも見つからないと思ってたんだけど？
近付くと二人の話がうっすらと聞こえてくる。
「このスポットは・・・・・・・・・・・・長けた男・・・・・・・・・むろん、・・・・・・いるがね」
うん、何言ってるのか全く分からん。
まあ、ここに隠れているということは俺と同じように大戦がめんどくてサボろうとしている奴だな。
つまり、俺の同士だな!!
仲間がいたのか、こんなに嬉しい事はない。
一緒に東西交流戦や学長について愚痴ろうぜ!!
俺は、笑いながらスポットにいる二人に近づいて行った。

「誰だ!!!!」
二人のうちの一人が俺に向かって怒声を上げる。
君たちと同じように東西交流戦をサボろうとしてる仲間だよ。
満面の笑みで二人が見えるところまで歩く。
そこで俺が目にしたのは、一見親子に見える天神館の制服を着た二人だった。
あれ？これやばくね??
「川神の生徒か、貴様は何者だ？　仲間はどうした？」
イケメンが問いかけてくる。
しょうがない、正直に答えて逃がしてもらおう
只の生徒だよ、見ればわかるだろ？　後、仲間は来ないよ。ここに来たのは俺一人だけだ。
笑いながら答える。
イケメンが一歩下がる。
そうか、逃がしてくれんのか！
イケメン、お前いい奴だな！
イケメンが空けてくれた空間を通ろうと歩き出したとき
「御大将!!」
叫び声とともに槍が腹に向かってきた。
腕で槍の柄を払い狙いをずらす。
いきなりかよ、マジで危なかった。
このオッサンなにしやがる!!
せっかくイケメンが逃がしてくれようとしてんのに!!
オッサンを睨みつける。
「御大将、ご無事ですか?!」
「あ、ああ。　すまない島」
オッサンはイケメンに声をかける。
イケメンじゃなくて俺を心配しろ！
流石に払ってなかったら内臓が逝ってたぞ!!
イケメンもなんか言ってやれと思いイケメンを見ると、そこには剣を抜き放っているイケメンがいた。

何故に??
しかも、徐々に気が高まってやがる。
「奥義・光龍覚醒!!!」
イケメンの髪が黒から金にかわり逆立っていた。
「行くぞ!!　島!!!」
イケメンを先頭に二人が俺に向かってくる。
いやいや、イケメン。
お前さっき俺を逃がそうとしてたじゃん!!
なんで、先頭に立って俺に向かってくるわけ?!
俺は人外じゃなくて一般人なんですけど!!
そう思っても、目の前の二人が俺に向かって来ている事は変わらなかった。

俺は状況が不利と思い島とともにこっそり誰にも見つからないであろう場所に逃げてきた。
よし、ここで時間切れまで待てばいい。
それは、一瞬の気のゆるみだった。
誰かがこの場所に向かっている。
いや!!　すぐそこに居る!!
そう思った時にはもう声が出ていた。
「誰だ!!!」
島は臨戦態勢に入っている。
俺は、誰かがいるであろう場所を見つめた。
工場のパイプの陰から一人の川神学園の男子生徒が自然体で出てきた。
そいつは俺たち西方十勇士の二人にあったというのに自然体のままであり、顔には恐怖など微塵も浮かんでおらず。

むしろ、笑顔のままであった。
その姿に恐怖を少し感じる。
その恐怖を抑えつけてそいつを見る。
とにかく、敵でありこの場所に俺がいることを知られたからには逃がすわけには行かない。
倒す前に、仲間の情報だけでも吐かせよう。
「川神の生徒か、貴様は何者だ？　仲間はどうした？」
「只の生徒だよ、見ればわかるだろ？　後、仲間は来ないよ。ここに来たのは俺一人だけだ。」
その質問に対して男は笑顔で答えた。
当然のことを聞くなというように。
抑えつけていた恐怖がさらに増す。
自分の本能が感じている。
こいつはヤバい。
自分の体が逃げたいと足を一歩下げる。
目の前の男が自分に近づいてくる。
来るな!!来ないでくれ!!
恐怖で体が動かない。
「御大将!!」
その恐怖を払ったのは俺の腹心である島の声だった。
島は槍を男に向かって突き出す。
島は俺の腹心であるとともに武においても信頼している。
相手の意識は俺に向いている。
その状態で島の槍をかわすのは無理だ。
不意打ちではあったが相手の男は倒れると思った。
殺った!!
しかし、槍は男に当たらず男の横を通っていた。
不意打ちの状態で島の槍をかわす？
こいつは、間違いなく俺より実力は数段上。
武神クラスだと確信した。
「御大将、ご無事ですか?!」

島がすぐさま俺に向かってくる。
この時ほど、こいつが俺の腹心でよかったと思ったときはない。
島に大丈夫だと返事をかえし男に向き直る。
男は島を睨んでいる。
その怒気が自分に向いてないとはいえ体が震えそうになる。
余波でこれなのだからその怒気を向けられている島はたまったものではないだろう。
島は小刻みに震えており、顔も少し青い。
これは、手の内を隠して戦える男ではない。
剣を抜き放つ。
「奥義・光龍覚醒!!!」
島だけでなく俺自身を奮い立たせるために島に対して声をかける。
「行くぞ!!　島!!!」
先頭に立ち武神クラスであろう男に向かって行った。

金髪になったイケメンは刀を大きく振り上げた。
うん、殺す気満々だな。
刀が振り下ろされる。
白刃流し（しらはながし）
刃の側面に捻りきった右拳を入れ、同時に一気に捻り上げる。
刀を払うと同時に突きを入れる、攻撃と防御を同時に行う技だ。
拳は刀を払い、イケメンの顔面に向かう
「何!!!」
右拳はイケメンの顎を打ち抜く。
イケメンから力が抜け膝をついて倒れ伏す。
やばかったぁぁぁ!!

柔術のちょび髭先生の友人である空手の酒好き先生と女剣士の不思議な先生に感謝した。
まあ、修行の内容は尋常じゃなかったけどな!!
その時を思い出すと寒気と同時に涙が出そうになった。
「御大将!!!!」
もう一人のオッサン、名前島って言ってたな。
島が、イケメンに向かう。
無駄だって、意識刈り取ったから起きないよ。
島は、槍を俺に構える。
「御大将の仇取らせていただく!!!!」
いや、殺してないんだけど？
島は槍を俺に向かって放ってくる。
突き出された槍を払い柄を掴む。
「ぬう、動かん!!」
島はどうにかして、槍を引こうとしている。
させるか、ボケ!!!!
元を正せばお前が不意打ちするからこうなってんだろうが!!
心の中で悪態をつく。
いっぺん、頭冷やしてこい!!!!
そぉぉぉいっ!!!!
槍を持ったまま島を海のほうへ投げ飛ばす。
島はその勢いに耐え切れず槍から手を放し飛んでいった。
ほどなくして、海に着水する音が聞こえた。
はあ、やっと終わった。
マジで疲れた。
手に持った槍をその場に置きながら感じていた。
徐々に誰かの気が近づいてきている。
その誰かが敵だろうが味方だろうがめんどくさいことにしかならない。
俺はその場をそそくさと去った。
その場から去った後勝鬨が聞こえた。

しかし、俺は気づいていなかった。
上から俺の後ろ姿を見られていることに・・・
やっと終わった。
とっとと帰って寝よ。
工場から放れて家に向かった。

クリスから本陣に総大将がいないという報告を受けて俺は交流戦前に下見して隠れられる場所に向かって行った。
そこには、ポニーテールの女子が立っていた。
足元には敵の総大将である石田が気を失って倒れていた。
「君は？」
目の前の子に問いかける。
「自分は源義経だ。　武士道プランで今回川神学園に転入することになった。　よろしく頼む」
義経から武士道プランには九鬼財閥が絡んでいることを聞き、本題を聞くことにした。
「義経が石田を倒したのか？」
「自分は倒していない。　けれどこの場から去る人影を見た。　顔は見ていないが男性だったと義経は記憶している」
石田は西方十勇士の大将でもあるはず。
つまり、うちの学年に石田を倒せる奴がいるってことだ。
誰だ？
その時、東西交流戦前に一子がどうしても自分と同じ前線においてほしいと言っていた山内辰巳を思い出した。
山内とは同じクラスだ。
けれど、その姿を思い出しても石田を倒せるとは思えない。

もし、仮の話に山内が自分の実力を隠せるとしたら？
それも完璧に・・・
更に思い出すのは先日に起きた襲撃者不明の廃ビルの事件
あの事件は誰が行ったのか誰もわかっていない。
姉さん、武神と呼ばれる川神百代でさえわからない。
わかるのは、その襲撃者が武神クラスである事、
加えて、姉さんが言うには姉さん以上に気を極めている事
「まさか、な・・・」
そこまで考えて俺は考えることをやめた。
しかし、その至った結論を馬鹿なとは思いつつも否定しきれなかった。

第４話

東西交流戦の後俺は家に帰ってすぐ寝てしまったようだ
さほど仕事もしてないんだけどね!!
やったとしてもオッサンとイケメンだけだし
まあ、いいや
そう思いながら階段を降りてリビングに向かう
リビングには美味しそうな匂いが漂っていた。
おはよう、父さん、母さん
「おはよう、辰巳」
「おお、おはよう辰巳」
ああ、なんて平和な時間だろう……
川神学園というカオスな学園に通ってるため朝の何気ない時間さえも貴重に思えてしまう。ヤバい、俺なんか病んでないか?? 精神的に・・・・・・
考えるのやめよ・・・考えるだけ無駄な気がしてきた・・・
椅子に座り、母親が出してくれ朝食を食べながらテレビに視線を向ける
「えー、今朝から世界を震撼させている武士道プラン
具体的にどんな事かといいますと、寺ちゃん?」
「フッ。世界最大の財閥である九鬼は本日未明・・・
源義経、武蔵坊弁慶、那須与一ら過去の英雄を、現世に転生させたと発表した。
これが騒ぎの原因だな」
へー、なんか風間とかが好きそうな話題だな
雪広アナと総理の話によると転生とはクローンの事で九鬼は２０年前からヒトクローンの実験に成功していたらしい。
やっぱり、倫理的な問題とか出そうだよね
てか、成功したのは百歩譲っていいとして成功させたところがあの九鬼財閥だとすると・・・
野生の勘というべきか本能的に嫌な予感がする・・・

「義経さんたちは、本日から川神市にある川神学園が受け入れるそうです」
嫌な予感が当たってしまいお茶を吹き出すところだった。
おのれ、朝の平和さえぶち壊すか九鬼
俺の脳裏に同学年にいる金ぴかバッテンが思い浮かぶと同時にあいつの家族だもんなぁ・・・しょーがないという気持ちが沸き上がる
今でもカオスな学園がさらにカオスになる事は確実だ
どうか、一般人の俺が巻き込まれることがありませんように!!
そう思いながら朝食を済ませ学校に行く支度をした。
はい、無理ですよねー
「おい、そこのお前　お前川神学園の生徒だな　少し俺と戦え」
目の前に上半身全裸のガタイのいい男が立っていた。
は?というか誰?アンタ
「おっと、これは失礼した。俺は西方十勇士の長曾我部だ、チョーさんとでも呼べ」
はあ、で?チョーさんはなんでこんな所に?
「おう、交流戦で不本意な負け方をして名を下げちまったからな
武神を倒して名誉挽回というところだ、グハハハハ
で、ウォーミングアップとしてちょうど近くにいたお前に戦いを申し込んだんだ。」
いやいや、俺は一般人ですからウォーミングアップにもなりはしませんよ?
て事で、さよなら
「逃がさんぞ」
無理やりオイルをかぶって俺に襲い掛かってくるチョーさん
あれぇ?俺、さよならって言ったよね?
なんでタックルかまそうと向かって来てんの??
というか、こっちく来んな変態!!
ティー・ソーク・トロン
俺の放った肘がチョーさんの胸に吸い込まれていく
ドガンッ!!!

チョーさんはくの字に体を曲げて飛んで行った。
あり？滅茶苦茶軽かったんだけど？
てか、ヤバい!!周りに人ないよな？
ガタイの割には軽いな・・・
まあ、これ以上（周りの人いないけど）見られるわけにもいかないからな・・・
学校に行くか
そう言って、チョーさんを放置して学校に向かった
くたばれ、変態！
そう思いながら学校に向かう俺には物陰にいたメイド２人に気が付いているわけがなかった。

「おい、李　あいつは何者だ？」
「わかりません、あのような者がまだいたとは・・・
調査不足ですね・・・」
問いかけられた李は深く考え込んでしまう。
元を正せば西方十勇士の長曾我部が川神学園の生徒に戦いを申し込んだところから見ていた。
いざという時に自分たちがその生徒を助け出せるように。
その生徒は体格から見ても勝てるわけがないと思っていた。
しかし、結果は真逆だった。
加えて、長曾我部を吹き飛ばした技はムエタイだった。
ムエタイは今でこそ競技として受け入れられている武術ではあるが、本来は人を殺すために使われてきた武術であり戦争により発展していった武術という一面もある。
そのムエタイの技が咄嗟の一撃で長曾我部を吹き飛ばす威力
長曾我部も壁を超えていないとはいえ決して弱い訳では無い。
あの少年が強すぎるのだ。
何より、最後の一言「これ以上見られるわけにはいかないからな・・・」
あの少年は私とステイシーの存在に気が付いていた？

私は完璧に気配を消していたはずだ。完璧に・・・
ステイシーも気配を悟らせる失敗はしないだろう。
それに気が付いていた？
暗殺家業をしていた私の気配に??
「ステイシー、これはあずみに報告すべきです」
「だな、あんな奴がいたなんてな・・・
知らなかったぜ」
二人は急ぎあずみの所へ向かった。

ん？なんか変な悪寒が・・・
当の本人はそんな事になっているとは全く知らないのであった。

第５話

朝のＨＲは臨時全校集会だった。
「皆も今朝の騒ぎで知っておるじゃろう、武士道プラン」
全校生徒の前で学長　川神鉄心が説明をしていた。
「この学園に転入生が６人来ることになったぞい」
え？武士道プランって３人じゃなかったっけ？
というか、川神学園に転入して来るっていう時点でまともじゃないけどな!!
周りの生徒も俺と同じように人数に違和感を感じたようだった。
「武士道プランについては、新聞でも見るんじゃ
重要なのは学友が増えるということ。仲良くするんじゃ」
おおう！このカオスな学園の学長がすごい良いことを言った!!
学長の言葉に少し感動していると・・・
「…競い相手としても最高級じゃぞい、なにせ英雄」
おい学長!!何故に最後煽った!!
人が折角学長の言葉に感動してんのに!!
俺の感動を返せ!!!
そんな煽り方したら生徒たちが黙ってないでしょうが・・・
ほらほら、Ｓクラスの猟犬が反応してるし・・・
「武士道プランの申し子たちは、全員で４人じゃ。残り二人は関係者まず３年生、３―Ｓに入るぞい」
クラスなんかどうでもいいから!!
そんな俺の思いも届かず紹介は続いていく
「それでは葉桜清楚、挨拶せい」
学長の言葉の後に女の子が出てゆっくりと壇上に上がっていく。
周りの生徒は女の子の清楚な立ち振る舞いに感嘆の域をもらす
「こんにちは、葉桜清楚です。皆さんとお会いするのを楽しみにしていました。これから、よろしくお願いします」
挨拶した後、男子から歓声が巻き起こった。
その後、育郎の馬鹿なスリーサイズについての質問があったりと

色々あった。
Ｓクラスの井上にとっては腐ってるらしいです。
「女は小学生までだよね、変な意味しかないから!!
いやいや、変な意味じゃなくて」
もう、こいつダメだ・・・今更だけどな！
井上のバカは不治の病だから放っておくとして、一番の謎は葉桜先輩は誰のクローンわかっていないって事だ
「私は本が読むのが趣味なので、清少納言あたりのクローンがいいなと思ってます。」
葉桜先輩はああ言っていたが、絶対嘘だ!!
あのやること、なすこと、ついでに存在そのものが破天荒な九鬼が清少納言なんて生易しいクローンを武士道プランに組み込むわけがない!!
絶対、戦闘系の英雄だ!!
これは推測ではなく確信だ。
だって、あの九鬼だぞ？武神と互角だった揚羽さんの家族だぞ？
文系の偉人であるはずがない!!
大事だから2回言った。
次に紹介されたのは、源義経、武蔵坊弁慶
岳人達が弁慶に興奮していた。
確かに弁慶はエロかった。九鬼絡みじゃなければなぁ・・・
深いため息が出た。
その2人に続いて紹介されたのは那須与一
が、いっこうに姿を現さない・・・
「照れているのかのう、よーいーち！」
学長の言葉を皮切りに委員長が声をかける。
あ、井上が反応してあずみさんにシバかれてる
まあ、結局のところ与一はサボり、弁慶は全校生徒の前で川神水を飲んで2―Ｓの連中が闘争心を刺激されるなどがあり、武士道プランの生徒の紹介が終わった。
全校集会ぐらいまともに終わりやがれ!!

そう思った俺は悪くない・・・
「後は武士道プランの関係者じゃな、ともに1年生」
そうだった、後2人もいやがった・・・
黛が友達ゲットのチャンスだと息巻いてるのがわかる
まず、松風と話すのを控えような!!面白いけど!!
そう思っていると、行儀よさそうな奴らがぞろぞろと出てきた。
あれは、有名な交響団らしい・・・知らんけど・・・・・・
その演奏を出てきたのは・・・
「我、顕現である」
バッテンの妹だった・・・
ああ、更にカオスになるな
しかも、近くには金髪のファンキーな爺さん
護衛っぽいからスゲエ強いんだろうなぁ
「我は退屈を良しとせぬ、1度きりの人生互いに楽しくやろうではないか」
俺は普通の人生が1番です!!
兄も濃いけど、妹も濃いなぁ・・・
まあ、九鬼一族に普通を求めるほうが間違ってる、ていう話なんだろうなぁ
俺は、もう一人の執事のほうに目を向ける。
自然とその執事と目があった。
「おい、じじい。もう一人の転入生はどこだ?」
執事と目を合わせた状態で川神先輩の質問を聞いた所、学長の答えからこの執事ヒューム・ヘルシングがもう一人の転入生らしいとわかった。
このヒュームさんも強そうだから川神先輩もうずうずしてそうだなと思いながら川神先輩のほうに目をむけると川神先輩のすぐ後ろにヒュームさんが立っていた。
しかも、がっつり俺と目があってるし
え??
ああ、この人も武神同様に人外なのね・・・

俺にはもう笑うことしか出来なかった。

俺、ヒューム・ヘルシングは紋様の護衛として川神学園の1年生として転入することになった。この川神学園にはあの川神百代がいる。
俺にとってはまだまだ赤子だがな・・・
そう思いながら紋様の後ろで全校生徒を見渡す。
川神百代以外にも才能を持った者がまだまだいた。
ほう、百代以外にも壁を超えているものがちらほらといるな・・・
けれど、まだまだ赤子ばかりか・・・
そう思っているとある生徒と目があった。
普通ならば取るに足らんと無視するのだが本能的に目が離せなかった。
鉄心に促され挨拶をするもその生徒は何の感情も現さずただただ俺を見ている。
いい機会だと、瞬時に川神百代の後ろに立つ。
壁越えしていなければ何処に行ったのかわからず、壁越えしていても認知できない速さで。
しかし、その生徒はこちらを、俺を見ていた。
川神百代でさえ気づいていなかったのにだ・・・
あろうことか、その生徒は笑ったのだ。
俺の動きを見た後に・・・
フハハハハハッ!!面白い!!
心の中で自然に笑っていた。
川神百代並、もしくはそれ以上の赤子がいるかもしれないことに
偶然にも九鬼従者部隊零番ヒューム・ヘルシングに目をつけられた事を知る由もない俺は笑うしかできなかった。
転校先探そうかな・・・
迅速に・・・

ハァーーーーーーー

深ーーーーいため息は周りの喧騒に消えていった・・・・・・

第6話

朝の臨時全校集会が終わり、ＨＲに参加する。
１年にはあの濃いバッテンの妹と人外の執事、３年には謎のクローンの先輩、そして俺と同じ２年には源氏で超有名なトリオときている、、、
なんなん！この学校に平穏っていう言葉はないんですか?!
というか、平穏の意味知ってる?!
まあ、有るわけないんだろうなぁ、、、
なんせ、武神がいる学校だし、、、
やばい、改めて考えたら、視界がにじんできた、、、
唯一の救いは源氏トリオがＳクラスに在籍することになった事だ
Ｆクラスに在籍することになったら、絶対川神とクリスさんが黙ってないだろ
絶対決闘吹っ掛けるだろ、絶対（確信）
「う、うわぁっ?!」
違うクラスの軍人さんの声が聞こえた
あ、絶対決闘吹っ掛けたなあの軍人・・・
ホントに、生まれてくる時代間違えてんじゃないのか?と思いたくなるほど周りの奴らは決闘を行う
いや、やるな！とは言ってないよ?
この学園の校則だし・・・只、絶対決闘が起こると無事に済まないんだよなぁ・・・
ダメだ、こういう時は学校終わったら即行家帰ってゲームで癒されよう、うん、それがいい
「熊飼！　授業中に柿ピーを食うな!!」
Ｆクラス担任の小島先生にクマちゃんが指導されていた
鞭で、、、
というか、鞭って、、、ド変態は喜んでたけど、、、
あ、スグルが余計なこと言って指導されてる
バカだねー、反応したら絶対指導されるのに・・・

担任の先生が鞭で指導していても、他のクラスメートは驚きもせず転入生について話していた
そして、自分も鞭を使った指導に対して何も思わなくなっている
慣れってすごいよな!!　ヤバい、言ってて悲しくなってきた
「そう願いたいもんだ。　これ以上騒がしいのは嫌だぜ」
俺知ってるよ?　君、口ではそう言いながらも意外と悪い気していないの
俺知ってるよ?
絶対、まだ何か起きるな・・・
これだけは確信をもって言える
1度ある事は2度あるって言うけど、2度どころか毎日何か起こるのがこのカオスな学園だから!!
どうか!一般人の俺は巻き込まれませんように!!
目をつぶって神様に祈った・・・
あれ?うちの学園、武神いるから神様って駄目な気がする・・・
学校の帰りに、お寺と教会に行こうと決めた・・・
放課後
よっしゃー!!学校終了!!
早く、お寺と教会に行こう!!
自分のカバンに荷物を詰め込み帰ろうとしていると、
「山内君、これからみんなで転入生見に行くんだけど一緒に行かない?」
川神さんからのお誘いが来た・・・ジーザス!・・・・
やっぱり、神様は武神に勝てなかったようだ・・・
だが、俺はノーと言える日本人
ノーと言わせてもらうぜ!!
というか、ここは断らないといけない!!と俺の生存本能が言っている!!
ゴメン、(お寺と教会に行く)至急の用事があるんだ、、、
申し訳ない顔をして川神さんに答える。

「そうなのね、わかったわ！」
残念そうな顔をされたがすぐに無邪気な笑顔で返事をしてくれた
その後、川神さんはいつものメンバーとSクラスに向かって行った
よし、また何か言われる前にさっさと帰ろう
途中だった帰りの支度を瞬時に終わらせ、ダッシュでお寺と教会に向かうため廊下に出た
「冗談じゃねぇやってられるか!!」
その叫び声とともに目の前に誰かが出てきた
危ねぇ!!
走ってくるやつの勢いを利用してそのわからない誰かを地面に抑えつける
「うぐっ！」
抑えつけた相手のうめき声が聞こえた
ヤバい!!条件反射で相手を抑えつけてしまった!!
「なんだ！　お前も組織の人間か?!　俺を消しに来たのか?!　離せ!!」
抑えつけた相手は意外と丈夫らしく抑えつけられながらも組織だ、なんだ、と騒いでいる
あ、ゴメン・・・つい条件反射で・・・立てる？
抑えつけた相手を離し怪我がないか確認する
誰？このイケメン・・・
純粋の疑問が生まれた
こんなイケメン俺は今まで一度も見た事がない、てかいたら四天王は五天王になってるはずだ・・・
俺が見た事のないやつは今日思い当たる人物が一人いる
全校朝礼に出ていない那須与一・・・
学長の話では那須与一は男と聞いている
加えてこのイケメンはSクラスから走ってきた・・
ということは、こいつ源氏トリオの一人だ・・・
「お前は組織の人間なんだろ?!　俺を消しに来たんじゃないのか?!」
源氏トリオの一人と思われる那須与一君はいまだに騒いでいる

可哀想に・・・特有の病気にかかっているなんて・・・
とりあえず、那須与一君の体を確認する
ずいぶん鍛えているらしく怪我は見当たらなかった
うん、それだけ騒げれば大丈夫だね
というかうしr「ご協力どうも。掴まえたぞ与一。私はお前を掴まえた」
言っている途中に朝礼で見た武蔵坊弁慶が那須与一君を持ち上げていた
片手で・・・
流石、九鬼、マジで人の予想を裏切らねぇな!!
175はある男を片手って・・・
「ぐおおおっ、あ、姉御、待て、離せ!!」
持ち上げられ悶えながらも抵抗している那須与一君
そんな那須与一君を見ながら諦めって肝心だよねと思ったら笑ってしまった
そんな笑いが聞こえたのか
「改めて、協力どうも。」
武蔵坊弁慶さんからお礼を言われた
いやいや、武蔵坊さんお礼なんていいよ。ぶつかったのは俺だから。えっと、那須君でいいのかな?ぶつかってゴメンね?
「ぐおおおおおおおおっ」
那須君はどうやらそれどころではないらしい
「こいつは与一でいいよ、私の事も弁慶でいい」
わかった、弁慶、与一。
意外と武蔵坊さんは気さくな人らしい
まあ、片手で男持ち上げてる時点で拭いきれない違和感あるけど・・・
「じゃあ、私はお仕置きがあるから」
弁慶は与一を持ち上げながらSクラスへと戻って行った
その姿に誰もツッコミが無いところに流石川神学園!!と思ってしまった自分を殴りたい・・・俺もツッコんでねぇ・・・

帰ろ・・・帰ってマンガとゲームに癒されよう・・・
帰りにお寺と教会に寄ったのは言うまでもない

ぶつかっただけ?そんな馬鹿なことがある訳がない
与一を持ったままSクラスに帰る間今さっき話した男子の事を考える。
自分が与一を追いかけていた時、与一と男子がぶつかる瞬間から見ていた。
ぶつかる!と思った瞬間あの男子は与一の手を取って抵抗できないように関節を極めて地面に抑えていた。あれは、捕手術だ。柔術よりも古く、今は柔術にも組み込まれているところもある。これがまだ与一が普通の学生ならやや強引だが理解はできる。
けれど、抑えつけられたのは与一なのだ・・・
私たちは、源氏のクローンということもあり武道を嗜んでいる。
何より、私たちが普通の学生に抵抗もなく抑えられるわけがないのだ。
私たちは武将のクローンであり、抑えられる瞬間に返し技を行うことが条件反射として身についている。
いかに与一が焦っていたとしてもその反射は起こるはず・・・
つまり、あの男子はその反射を起こさせないスピードで抑えたか、その反射の返し技さえも封じたか、のどちらかになる。
どちらを取っても武神クラス、少なくとも壁を超えていないとできない事だ。
東西交流戦の時に主が見た後姿はもしかして・・・
そう考えると、あの男子に興味が少し湧いてきた。
あの男子は、、、そう考えて重要なことに気づく
「名前聞くの忘れた・・・」
もう引き返してもあの男子はいないだろう、というかメンドい

まあ、同じ学園なんだしあった時に聞こう
興味は持ったが、やはり生来のめんどくさがりがでるあたりどうしようもない
一方、その頃・・・
うん？なんか変な悪寒がする・・・
大好きなゲームをしながら癒されていた件の人
教会やお寺に行ったにもかかわらず、興味を持たれるあたりこっちもこっちでどうしようもない・・・

第７話

「ひかえい、ひかえい、ひかえおろーう!!」
「紋様のおなーりー!!」
川神学園、昼休み
この時間は、俺にとっての平和な時間といっても過言ではない。
なぜなら、みんな昼飯に集中するから決闘とかめんどくさそうなことが起きない!!
と、思ってたんだけど・・・
その平和な時間さえも一年とハゲの言葉でぶち壊された。
というか、あのハゲいつの間に仕えたんだ?
「おい皆、廊下見てみろ。九鬼紋白が歩いてるぜ」
ヨンパチ、、、余計な事言わなくていいのに、、、
ヨンパチの言葉でみんながバッテンの妹に視線を向ける。
「紋白ちゃんは小さくてかわいいですね。直江ちゃん」
「委員長みたいなお姉さんキャラが好きそうなタイプだ」
うん、委員長は鏡で自分の姿認識しようか。
直江も流石、女の子の扱いに慣れてるな。
うん。爆ぜろ
おっと、つい本音が・・・
「確かに風格があるというか、堂々としてるよね」
「あっという間に1年生系を制圧系でしょ、凄ぇ系」
「しかもだ、もう忠実な配下を従えているぞ」
皆の意見はそれぞれだったが確かに堂々としていたし、ある意味で忠実な部下もいた。
ハゲとか、ハゲとか、ハゲとかな!!
まあ、あのバッテンの妹なんだ、堂々としていないと逆に違和感を感じるわ!!
と思っていたら、バッテン（妹）は通り過ぎて行った。
まあ、何も起きなくてよかった!!
という事で、幸せな昼寝しよｚｚｚ

昼寝していたらいつの間にか放課後になっていた・・・
いや、せめて誰か起こしてくれてもよくね？
まあ、とにかく帰ろ・・・
靴を履き替えてグラウンドに出ると、グラウンドにはギャラリーができていた。
まあ、どうせ決闘だろうな（確信）
とっとと帰ろ。
帰り道、変態の橋
橋の下では武神である川神先輩が決闘していた
川神先輩の顔は楽しくてしょうがないというような笑顔だった。
「ずいぶんとまあ、楽しそうに戦ってるなぁ」
「ほう、お前もそう思うか？」
え？誰?!俺の周りに人いたっけ？
振り返ると・・・
ああ、いたよ、、、人じゃなくて武神と同じ人外が、、、
確か、1年に転入してきたヒューム・ヘルシングさん
マジで瞬間移動みたいに人の後ろに立つのやめてほしいんですけど!!
と言いたかったけど、言ったらシバかれそうだから黙ってよ・・・
命って大切だよね!!
「えっと？・・・・・・」
「ヒュームさん、とでも呼べ。で、お前はあの川神百代を見てどう思う？」
「まあ、危ない人ですよね（俺の平和な学園生活にとって）」
「ほう・・・危ないとはどういう意味だ？」
「戦闘狂のところですね（川神先輩、決闘大好きだし・・・）」
あれ？俺変なこと言った？
一気に目の前のヒュームさんの目が鋭くなったんですけど・・・

「もう一つ問おう、お前はあの戦いを見てどう思う」
うーん、あの川神先輩と戦ってるのを見てどう思うか？かぁ・・・
川神先輩の決闘は、たいてい川神先輩の正拳突きで終わる。
そう一発で試合が終わっている。
「可哀想だと思います。」
川神先輩の相手の人が!!
だって、一発もらって星になってるんだよ?!
まあ、あの川神先輩に挑戦しようとする時点で頭のねじ1本どころか、2，3本抜けてるとしか思えないけど・・・
それでも、まともに戦えないのは可哀想だと思う。
「ぐはっはっはっはっ!!可哀想か!!」
なんか、いきなりヒュームさん笑い始めたぞ？
俺面白いこと言ったか??
というより、早くこの人外のヒュームさんから放れよう
「じゃあ、俺はこれで失礼します。」
「お前は、あの川神百代と戦おうとは思わんのか？」
ヒュームさんに軽く頭を下げ背を向けると後ろから問いかけられた。
ハハッ、なんか死刑宣告と同じような質問じゃないですか？
まあ、ヒュームさんなりのジョークなんだから一応笑って返そう
「ハハッ、冗談でしょ？」
このじーさんジョーダンきっついわー
俺に死ねって言ってるよね?!
俺の返答にヒュームさん自体はだろうなという顔で笑ってたけど
返答が分かり切ってる質問するなんて意地悪い人だなー
まあ、いっか早く帰って途中のド○○エやろ

面白い赤子だった。
只々、その言葉に尽きる。
全校朝礼の時から軽く壁越えしていると思っていたがこれほどとはな。
俺が、その赤子を見つけたのは偶然だった。
その赤子は橋の上から川神百代の戦いを見ていた。
いや、戦いではなく川神百代を。
やはり、この赤子も戦いに飢えているのかと思ったがそうではなかった。
まるで、つまらないものを見たかのように「楽しそうに戦ってるなぁ」とつぶやいたのだ。その一言に興味を持ちついつい声をかけてしまった。
声をかけたとき、その赤子は振り向いたがその振り向きだけでもいかに修練を積んでいるのかが目にとれた。重心は安定しており、体の軸も全くぶれていない。
なおかつ、いつでも逃げられるように、攻撃を防げるような体制をしている。
おそらく、この赤子は力量差を測り、撤退も視野に入れている。
加えて、その一連の動作を無意識のうちに行えているのだからこの赤子の将来が楽しみで仕方がない。
その赤子に川神百代について質問をしてみた。
その質問の答えは、シンプルなものだった。
「まあ、危ない人ですよね」
「戦闘狂のところですね」
普通の学生の言葉ならば、その通りの意味で受け取れるがこの赤子からの発言となると、取る意味が異なってくる。この赤子が言っているのは精神的に不安定なところを言っているのだろう。戦闘に飢えているが故の不安定さを。
川神百代の戦闘に対する答えは笑ってしまった。
あの、川神百代の戦闘を羨望や恐怖などではなく只々本心からの哀

れみが出るとは思わなかった。只の一言、可哀想、それだけだった。
その一言にすべてが表されていた。
戦いの飢えに、その飢えを満たそうと戦うが満たされるどころかさらに飢えがひどくなるそんな戦いをしていると。
折角の才能で今まで磨き上げた武が雑になっていると。
赤子は、頭を下げその場を去ろうとしていた。
「お前は、あの川神百代と戦おうとは思わんのか？」
この質問に対する赤子の答えはわかり切っていた。
「ハハッ、冗談でしょ？」
その答えには明確な拒絶が込められていた。
その赤子が去る姿を見るがやはり面白い赤子だと思った。
「少しあの赤子について調べてみるか・・・」
その調査内容には驚くべきことが書かれてあったが、納得できることが書いてあった。

深夜　川神院　稽古場
「鉄心、門下生を見させてもらったぞ」
深夜、ヒューム・ヘルシングは川神院を訪れていた。
「どうじゃった？なかなかいけとるじゃろ？」
その川神院の総代であり、武神の祖父　川神鉄心
「心技体、ともに素晴らしい育成だ。　が、1つ苦言を呈させてもらうぞ
危なっかしい連中の管理が出来ておらんぞ」
その発言にやはりかと顔を歪める鉄心
ヒュームが言っているのは、百代と釈迦堂の事であり特に百代には敗北が必要だと言っていた。
「総代。酒の用意ができましたヨ」
酒を持ってきたのは川神院で師範代を務めるルー
「せっかくじゃ、酒に付き合っていけヒューム」
「では、肴に俺の標本コレクションをと言いたいがさらに面白いことを肴にしよう」

「ほう、なにか面白い話でもあるのかの？」
「気になりますネ」
「あの、無敵超人の弟子が川神学園に在籍しているぞ」
その一言に鉄心とルーの表情が固まった。
無理もない、無敵超人とは武に関わるものにとって伝説の人物である。
が、その存在は知る人ぞ知る人物なのである。
「なんじゃと？あの無敵超人の弟子じゃと？」
「無敵超人とは〝あの〟無敵超人ですカ？」
「俺たちが、無敵超人と呼ぶ奴は一人しかいない。その弟子だが、少し会話をしたがなかなか面白い赤子だったぞ」
こうして、ヒューム、鉄心、ルーの会話は続いていった。

そのころ、、、
「だーっ!!　デス○○ー○強すぎだろうが!!　こんなん勝てるか!!ボケ!!」
ゲーム機に本気でキレていた。
デス○○ー○よりも凶悪な裏ボスに目を付けられているとも知らずに・・・

第8話

今日も学校行くかー
「俺はシンロン。　愛も情も許さない、、、
川神百代、いざ勝負!!」
うん、いつも通りの朝だな
「うぐわぁ！　お前に勝ち、梁山泊に入ろうとしたものを―!!」
あ、星になられた、南無
「さすがモモ先輩、秒殺には定評があるぜ」
なんか取り巻きの人が言ってる、、、
いやいや、秒殺って、、、
ホント人間やめてるな、川神先輩
早く学校行こうっと、俺の勘だとこの後めんどくさいことが起きる
(確信)
ざわざわざわ
ん?なんか周りがちょっと騒がしくなったな
おい、見てみろ葉桜先輩だぜ
ああ、マジで清楚だよなぁ
、、、あの九鬼のクローンの葉桜先輩がいるだと、、、
ヤバい、いよいよ俺の勘がさらなる危険を告げている、、、
ここはエンカウントする前にさっさと学校行こう
ん?なんかフラグ立った気がするけど気のせいか?
そう考えているうちに周りの学生たちはいなくなっていた
気のせいだな!!
うぉらあああ!!
ハイ、キノセイジャナッカッタデスネー
なんかバイクが爆走しながら走ってきてるし
しかも、なんかぶつぶつ言ってるし
なんで、朝からこんな事件に巻き込まれんの?!
とりあえず、見たまま見逃すのも気分悪いし止めるか、、、
てか、こういう事件で見て見ぬ振りしたら先生たちに殺されそうだ

し、、
あ、そっちのほうが怖いわ
よーし、朝から頑張っちゃうぞー!!
バイクに乗ってるやつはひったくりをした物に意識が向いている
加えて周りに生徒はいない、、、
となると、手っ取り早く運転手降ろすか無理やり
そう決めると行動は早かった。
はい、タイホー
運転手の襟を無理やりつかみ地面に叩きつける
運転手のいなくなったバイクはふらふらとゆられながらも前に進んでいた
下からうめき声が聞こえてくるが、どこかで武術をしていたのか受け身を上手くとっているそして、人の顔を見るなり騒ぎ始める
俺は国のために働いていたんだから楽をしても許されるんだ!!
俺が誰かわかっているのか?
朝からうるせえ!
知るかボケェ!!
と、叫ぼうと思ったが遠くから何かが飛んでくる
え?
太陽の光に反射して見づらいから目をこらしてよく見てみる
矢?え?!なんで?!
矢はとんでもない速度で顔の横を通り抜ける
ドゴォォォォ!!
矢がバイクにぶつかり吹き飛ばす
あれ?矢ってバイクとぶつかるとあんな音するの?
自分の顔から血が瞬時に引き顔が強張るのが自分でもよく感じられる
むしろ、顔の筋肉がうまく動かせない
飛んできた矢が自分にぶつかったらと考えただけでゾッとする
なんとか、首をゆっくり矢の飛んできたほうに向ける
うん、こいつおいてとっとと逃げよ

ちょび髭先生に習った関節と意識の飛ばし方を瞬時にやって学校にダッシュで向かった

与一が矢を放つまではよかった
その後だ、事件が起きたのは
矢を放った与一が真っ先に気付いた
「おい、バイクの先に人がいやがる!!」
その言葉で全員がバイクのほうを見る
姉さんが動くとしてももう遅い!!
その後、信じられないものを見た
与一や京ほど目がいい訳ではないから漠然としか見えなかったが、バイクの先にいた人物はバイクから犯人を引っ張り地面に叩きつけたのだ
驚くべきところはそこだけじゃない、与一が放った矢をいとも簡単に避けたのだ
全員で走ってその場所に向かうとそこには関節が外され意識がない犯人しかいなかった
「姉さん、この関節を外すのって、、、」
「ああ、前の事件のやつだろうな」
そうつぶやく姉さんは悩まし気な声でつぶやく
「与一、その犯人を捕まえたやつはどんな奴だった?」
弁慶が与一に尋ねる
「ああ、俺らと同じ制服着ていたがそれ以外はわからなかった」
「私も、制服までしかわからなかった」
京と与一でこれなのだ、他の人はわからないだろう、、、
川神学園の生徒、姉さんクラスの人物、、、
以前も同じようなことを考えたときに否定しきれなかった山内辰巳が頭に瞬時に浮かんだ、、、

与一は一人考えていた

何故俺ははっきりと見えた顔を言わなかったのかと、、、
理由の一つはわかり切っている、目があった瞬間にとてつもない悪寒に襲われた
そして、同時にその目が語っていた
黙っていろ!と、、、
そして思った、なぜあいつはあの力を隠すのか?と
与一には瞬時にその答えがわかった、あいつも俺と同様に組織に狙われている身なのだと
だからこそ、俺もあいつのことを黙っていようと考えたのだと
今度、あいつと今後の組織について話していかなければな、、、

その頃、与一に同類認定された人は、、、
くそー、朝からいいことしたと思ったらいきなりとんでもない速さで矢が飛んでくるし散々だった、、、
ぼやきながら、学校に向かっていた

第9話

「んー、お腹すいたわねぇクリ…」
「まぁそこそこな。京はどうだ？」
「一見なんともなさそうだけど…実はすいている」
そんな会話が聞こえる
うん、俺も腹減ったー、、
只今、3限目の後の休み時間
あと1時間で昼飯だけど、朝からの事件で俺は腹がとても減っている、、
「お腹すいたよぅ。カロリー欲しいよう…ガリガリ…」
おい、シャーペンは人間が消化できるもんじゃないぞ…
ダメだ、朝の疲れと空腹でツッコむ元気もない
昼は屋上でのんびりしよう…
とりあえず、屋上来たぞー
うん、風が気持ちいいなー!!
腹も満たしたし、ここはやっぱり昼寝だよね!!
そう思いながら、貯水槽の上に昇ると……先客がいました……
クラスメートであり風間ファミリーの軍師である直江大和君……
なんなん！ホントに!!朝から狙撃されるわ!!武神の弟ポジの人に出会うわ!!
なんなん?!神様は俺の事嫌いなの?!
嫌いなんでしょうね!!嫌いじゃなかったらこんなに立て続けに俺の平穏を乱さないもんね!!
俺は人外じゃなくて一般人なのに!!
「えーっと…」
はっ！神様に訴えてる間に直江君から問いかけがあったようだ
「ゴメン、直江君。ちょっと考え事してた…」
「大和でいいよ、えっと山内君はどうしてここに？」
「俺のほうも辰巳でいいよ。いや、最近ここを見つけたからちょっと

のんびりしようと思って」
「そうなんだ、ここは俺とキャップしか知らない場所だからさ」
それは、あれか？何でテメー俺らしか知らない秘密の場所に来てんだコラァ!!ってことですか？俺だって好んでお前らがいるとこに行くかボケェ!!
「えーっと…」
ヤバいヤバい、眉間にしわ寄ってた…笑顔って人とのコミュニケーションで超大切だよね!!
「ゴメンゴメン、気にしないでちょっと目が疲れ気味で…」
「そ、そうなんだ。ここって気持ちいいよね」
その言い訳は苦しいだろ・・・と思いながらも話を流せる大和はさすがだと思います。
そのスルースキルは流石ですわ・・・
「おっ、こんな所でしゃべってる男のコたちはっけーん」
その声のする方へ視線を向けるとそこには俺の平穏を乱す（確信）と俺の勘が告げている女の人が立っていた。最近、俺の勘馬鹿にならないくらい当たるからなぁ…悪い方に……
「私も散歩がてら、サボりスポット探してるんだよん」
「おお、な、なるほど」
大和は登場した女の人に鼻を伸ばしている・・・
多分、風吹けとか思ってるんだろうなぁ……
俺も思うけど…
というか、この人絶対気付いてるだろ…邪な考えに……
そう思いながらその女の人に視線を向けると目があった
あれ？
「いいねぇこの場所。涼しい風吹いてるしさ」
「そうっすね、ここいい場所ですよね、なぁ大和」
「え?!」
話が振られると思っていなかったのか素っ頓狂な声を上げる大和
バッカ！俺がこんな俺の平穏を乱す人と二人で会話するか!!ここはしゃべりたそうな大和、お前に譲ってあげよう……

言っとくけど、押し付けたわけじゃないぞ!!俺は善意で話せるように大和に話を振ったんだからな!!
「そうですね…いや良いところを見つけましたね」
素っ頓狂な声は上げたがすぐに持ち直して普通にしゃべり始める
「期待しても、パンツは見えないと思うよ。ごめんね」
ほら、やっぱり気づいてたよこの人…
この人、川神先輩より注意しなきゃいけない人かも……
「なな何をおっしゃいますか、そんな事は思ってません」
大和、それは苦しいと思う
「屋上クリアー。引き続きたんさーく!!」
「あ、ちょっ…おぜうさん?」
女の人は満足したのか笑顔でその場を去って行った。
去り際に目があったのはなんで?
とにかく、いいタイミングだし俺もこの場所を離れるか…
「じゃあ、俺もそろそろ行くわ」
「え?」
「じゃーなー」
追及される前にさっさと給水塔から降りて階段に向かった
あのままあの場所にいてもめんどくさいことにしかならなさそうだし…
てか、全然ゆっくり出来なかった……

給水塔の場所から離れて、あの場所にいた二人の男のコたちについて考える
一人は、年上に好かれそうな普通の男のコ
もう一人は、特に取り上げることもない男のコだと思った、見た限りでは……
実際、話してみると前者の子は見たとおりだったが、後者の子は全

く違った……
後者の子は話してる最中に私に対して警戒心を示した。加えて、私を見る目だ。
さも、興味はないと言わんばかりの無関心の目、関わるなと初対面の人から言われたように感じたのも、警戒されたのも初めての事だった。私が去る時でさえもその目は安堵や残念がる目には変化しなかった。むしろ、私の事を写そうとしなかった。
けれど、逆にその無関心の目が私を引き付けた。
同時に面白いと思った。
これからの学園生活であの子と関わるのも面白い。
まず、どうやってあの子の警戒心を解こう
「楽しくなりそうだなぁ……」
考えるうちにぽつりと言葉がもれた
多分、私の顔は笑っているんだろう、虎や豹が獲物を見つけた時のように

その頃の獲物……
「やばい、なんか凄いゾクッとした!!」
辺りを見渡しても誰もいない……
「うん、風邪だな!!」
誰からは薄々勘づきながらも強引に風邪だと自分を誤魔化していた